

石和鷹
Iwano Taka

茶湯寺で

ちやとうでら

見た夢



石和鷹

Isawa Taka

茶湯寺

ちやとうでら

見た夢

江苏工业学院图书馆

藏书章

集英社

著者略歴

1933年埼玉県羽生市に生まれる。早稲田大学仏文科卒業。出版社勤務を経て88年から創作活動に専念。89年『野分酒場』で泉鏡花文学賞、95年『クルー』で芸術選奨文部大臣賞、97年、ライフワークである『地獄は一定すみかぞかし 小説暁烏敏』で伊藤整文学賞を受賞。4月、下咽頭癌のため死去。

ちやとうでら
茶湯寺で見た夢

著者
いさわ たか
石和鷹

一九九七年七月三〇日 第一刷発行

発行者
小島民雄

発行所
株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五・一〇 一〇一・一五〇
電話(編集部) 〇三・三三三・〇六一・〇〇 (販売部) 三三三・〇一六・三九三
(制作部) 三三三・〇一六・〇八〇

印刷所
中央精版印刷株式会社／株式会社美松堂

製本所
中央精版印刷株式会社

著作権者との諒解により検印は廃止いたします。
定価(本体価格)はカバーに表示してあります。

©1997 Wakako Mizushiro, Printed in Japan ISBN4-08-774282-2 C0093

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複製複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

目次

茶湯寺で見た夢 5

おぼんと湯の町 57

ババジエフスカ 97

甚兵衛広沼のブラックバス 131

平成七年のネバーダイ 177

利根大漁歌 201

装丁

菊地信義

装画

町田市立博物館所蔵・大津絵のうち

「鬼の三味線」

茶湯寺で見た夢

茶湯寺ちやとうでらで見た夢

一

私は、コワレモノになってしまった、と感じている。かろうじて原型はとどめているものの、もはや誰からかえりみられることのない、使用不能の残骸。

昨夜も、家人が寝静まってから風呂へ入り、姿見に裸身をさらして、思わず目をそむけた。カタカタ……、と、膝の関節が鳴って、鳴り止まなかった。寒さのせいにあらず。六道絵に描かれていたあわれな亡者がそこにいたからだ。

私は生来、小兵で痩せっぽちである。スポーツで軀をきたえたこともなく、人目を引くような筋肉など欲したこともありはしないが、それなりの充溢はあった、と、つい数年前、真夏の

海辺で撮った半裸の写真など、見ても思う。

それが、いくら病いのせいとはいえ、この変わりようときたらどうだ。暮夜、われとわが身を一瞥しておののかねばならぬとは、何たること……。

私は去年の暮れ、下咽頭癌のため、喉頭を全摘出し、そこへ空腸を移植するという手術を受けた。癌はたぶん、何年も前からわが咽頭に取りついていたに相違ないが、私の感覚では、それは突然来て、急速に進行したのだった。

ちょうど一年前の、いま時分のことを、私は思い出さずにはいられない。

オレンジジュースの最初のひと口が、ひりひり、咽喉にしみるようになっていた。それがそもその合図だったのだが、私は気にもとめなかった。ときに咽喉が痛むくらい、誰にだってあることだ。放っとけばよくなるにきまっている。いままでだってそうしてきたのだ。小兵で痩せっぽちであるとはいえ、私は六十になんたんとする今日まで、入院するほどの病気をしたことなんて、ただの一度もない。

ところが、今度ばかりは様子がちがっていた。刺激的な痛みはさらに強まり、それに、いやな嚥下痛が加わった。いくらか、しゃがれ声になっていたのでもなかったろうか。おかしい。ひょっとすると……、と思わないわけには行かなかった。

深夜に、ひとり、考えた。

私は十代の後半から喫煙の習慣に染まり、それは今日まで持ちこされている。いまは毎日、七、八十本のピースとセブンスターをケムにするヘピースモーカーなのだ。飲酒歴も長く、こちらは大学を出て勤めを始めたころから本格的になった。四十代の終りごろまでは、ウイスキー、ジン、ウオトカなどの強い酒を好んだが、最近は葡萄酒や焼酎のお湯割りのたぐいをたしなむことが多い。だが、酒杯を手にしなない夜はあっても、煙草をのまぬ日の一日とてなく、えい、くどくどと何を言いたいのか、といえば、咽喉の奥に喰らいついたものの心あたりは、ある。そのようなことを、右の掌^{てのひら}にグラス、左手の指に煙草をはさんで、とつおいつ、考えた。

それでもなお、医院の門をたたくのを一日のばしにしていたのは、やはり、病気の正体について宣告されるのを怖れていたからにちがいない。

だが、がまんしていられるうちはよかった。そうこうするうちにも、痛みは日ましにづのり、尋常とも思えなくなってきたのだった。

町の耳鼻咽喉科医院の紹介状を持って駆けこんだ癌専門の病院では、ファイバースコープによる念入りの診察と生検につづいて、採尿、採血、心電図、胸部レントゲン撮影にMRI（核磁気共鳴映像法）と、立てつづけにものものしい検査が行われた。

そして、それらの結果も待たず、

「下咽頭ですね」

一言だけ言われた。端整で、精悍な顔つきの中年の医師だった。「すぐ、放射線にかかりましょう。いや、二、三日後からでもけっこうです。いろいろ、ご都合もありましょうからね」「はい」

と、上の空で返事をして私は椅子から降り、一礼して診察室を出た。

医師は、癌や悪性腫瘍という言葉など、ただの一度だって用いはいしなかったが、私はこの日、このときから、名実ともに立派な下咽頭癌患者として登録されたのだ。

帰途、山手線電車の窓ガラスにうつっているのは、見るからに打ちひしがれた、完全な病人の顔だった。

喉頭や咽頭の癌を治療するには、放射線療法、化学療法を行った後に根治手術する場合と、手術後に化学療法、放射線療法を行う場合とがあるが、病巣の部位によっては、手術すれば声帯をも巻きぞえにせざるを得ず、永久的な失声という重大な事態が出来るため、まず、放射線でスタートするのが一般的とされているようだ。

私もそのような患者のひとりとして、毎日、その癌専門病院の地下二階、リニアック治療室の、固い治療台の上に横たわる身となった。

癌が初期ならば、放射線が一〇〇パーセント奏効する例もないではないらしいが、進行癌の

場合はどうなのか。また、私の癌がどの程度に進行した癌なのかもはっきりしなかったが、こ
うなったらもう、運を天にまかせるほかはない。

五月末から夏にかけて、放射線の照射はまず二十回行われ、十日間の間隔を置いて、追い討
ちをかけるように、さらに十回つづけられた。目いっぱい照射量である、と医師は言った。

その甲斐あって、いつとき、病いは癒えたか、と思われた。少くとも、痛みがきれいに消え
去ったのはたしかだった。ファイバースコープで、交互に私の患部に見入る医師たちの目に驚
きの色が見え、口もとも大きくほころんだ。

しかしながら、それは見せかけだけで、私の咽喉の最深部にひそんだ異形のは、頭を低
くして放射線の襲来をやりすごしつつ、ひたすら力をたくわえ、次なる蜂起のときにそなえて
いたのだった。

冷え冷えとした夏が終わって、例年になく台風が多い秋を迎えた。何か容易ならぬことの起こ
りそうな異常気象の秋だったが、灼けつくような咽喉の痛みから解放され、飲みもの食べもの
をしみじみ味わい、安堵の思いですごすことのできたのは、この荒れもようの秋の二た月にも
満たぬ間。私には甘美な猶予期間だった。

ある日、朝まだき、控えめにドアをノックするような軽い痛みがあり、気のせいと思いたか
ったが、それは日を追うて繁くなり、突然、何か打楽器でも打ち鳴らすかのように高まる。高

まるが、そのまま継続するのではなく、海の潮のように寄せたり返したりしながら延々とつづき、するうちに、狼藉は堪えがたいまでになっていた。

あらためて、精密検査をする。

結果は、疑問の余地もなく、癌の再発を告げるものだった。

「再発、と言うより、残存、と言ったほうがいいかもしれません」

「……………」

私にはどちらでも同じことだった。

そのまま、ずるずる……、と日が流れる。

「これから、次第に症状が強まってくるものと予想されます。ここ（と、医師は私の左首すじのあたりを指頭で圧しながら）痛くないですか？ ははあ、それならいいんですが、いずれこのリンパ節から始まって、あちこちへ転移して行きます。いえ、それほど迅速に、というわけじゃありませんが。しかし、そうなる前にですね、育った病気が気管を圧迫して、呼吸困難をひき起こすだろうと考えられる。そういう状態でここへはこびこまれてきた例が、つい最近もありました」

「……………」私は深くうなだれた。

と……、

「九鬼さん、九鬼祥一郎さん」

強い声で名を呼ばれた。「あなたご自身の生命の問題です。決断しなければ……。つらい選択だがやむを得ないでしょう。何度も申しあげているように、残念ながら、声を残すことはできない。しかし、これもまた何度も申しあげているように、失われた声はリハビリによって、個人差はあるけれど、相当程度、取りもどすことができるのです。躊躇なさるお気持はわかりますが、そのところを、よくお考えください」

「おたずねします。もう一度、放射線をかけることは……」

「とんでもない」

「手術しか道はない、と言われるのですね」

「わたしには考えられません」

いつも冷静な医師の、眉宇のあたりに、あざやかな朱の色がにじんでいる。私は退路を断たれたネズミだった。

企業人としての生命はこれで終るだろう、と私は思った。現在の勤務先の、現在のポストに、声を失ってなおとどまるということは不可能だ。企業というものの大小無数の歯車は、噛み合いつつ、一瞬も休まず、まわりつづけるのでなければならぬ。声を失ってしまったものは、そこでは一個の歯車でさえあり得ず、全体の活動を阻害する厄介な障害物でしかあり得な

いだろう。

声と言葉は、私の唯一無二の武器だ。リハビリによって、声を恢復することは可能だというが、いったいそれいかなる保証があり、どれほどの日子ひしを要するものか。私はもう若くはない。定年まで、わずかな歳月しか残されてはおらず、やり残した仕事の太なることを思うと、私は毛むくじゃらの手で、心臓をわしづかみにされるようだった。

どうにもあきらめ切れず、民間療法の薬や食品をヤミクモに買いあさって、奇跡の訪れに一縷の望みをつないだが、何もかも、もう遅すぎた。

日ならずして、痛み止めも効かなくなってくる。咽喉の奥の化けものは、私のあらゆる努力をせせら笑うように、足を踏み鳴らしつつ、縦横に細身の槍をしごいている。不眠の夜がつづき、私は進退きわまった。

たまらず、ころげこむようなかっこうで入院したのが、十二月初めの氷雨降る日。手術台の上はこの身を横たえたのはそれから十日後で、私はもうどうなってもいいような、ヤブレカブレの気分になっていた。

生還したのが、信じられなかった。

朝、九時前に手術室に入り、一般病院のICU（集中治療室）にあたる観察室へもどされた